原子力エネルギー問題のについて

A-1. 原子力発電の経緯

人類の欲望　　『次世代への決断』P22

① 世界人口 70 億人への増大

② 物質消費型生活

⇒　経済発展エネルギー需要　激増　　⇒　原子力エネルギー　　採用

ベースロード電源　（ドイツなどヨーロッパ諸国から非難されている）

A-2. 問題点　　『宗教はなぜ都会を離れるか』P107

① 生物全体に有害な物質　（人類の経済発展だけの目的：人間中心主義、愚かな選択）

放射性廃棄物：劇毒物　処理方法がない。　蓄積している。

⇒　自然界共通の有害物：発電技術には自然界への敵意が隠されている。

⇒　敵意を物質化する　明らかに　悪業を積む。

⇒　人と自然を分離。

② ウランは枯渇する。

③ 核兵器拡散の危険（アメリカとの政策、日本だけでは廃止できない）

④ 地球温暖化を促進。　海の水で冷却

⑤ 中央集権（東京電力、関西電力）電力独占、政治と癒着の弊害

B　生長の家の真理に照らし　『大調和の神示』　『次世代への決断』P43　P148

「天地一切のものと和解せよ」　ＤＮＡを破壊する放射性物質を自然界に放出に反する。

① 「人間は自然と共存」

② 「自然と対峙しない人間」の生き方　：自然中心主義：自然の背後に人間以上の価値を認める

③ 自然無限論を捨て　地球有限論　安定的な自然環境維持出来る経済活動

C　生長の家の目指す方向

宗教法人「生長の家」環境方針　　２０００年１０月１１日　　基本認識

地球環境問題は、その影響が地球規模の広がりを持つと共に、次世代以降にも及ぶ深刻な問題である。　今日、吾々人類に必要とされるとものは、大自然の恩恵に感謝し、山も川も草も木も鉱物もエネルギーもすべて神の命、仏の命の現れであると拝み、それらと共に生かさせて頂くという宗教心である。この宗教心に基づく生活の実践こそ地球環境問題を解決する鍵であると考える。

生長の家は、昭和５年の立教以来、“天地万物に感謝せよ”との教えにもとづき、全人類に万物を神の命、仏の命と拝む生き方をひろめてきた。

生長の家は、この宗教心を広く伝えると共に、現代的な意味での宗教生活の実践として環境問題に取り組み、あらゆるメディアと活動を通して地球環境保全に貢献し、未来に“美しい地球”を残さんとするものである。

C-1.　脱原発　　廃止するターゲット　を決める。

①　５年程度で原発廃止し[自然エネルギー(再生可能エネルギー)＋省エネ]で代替え

②　１０年程度　　同上

「原発ゼロ・自然エネルギー基本法案」　原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟　超党派

火力発電（石油、石炭など地下資源）も廃止する。　資源の奪い合いが無くなる。

それが可能であることを　森のオフィスで実証

C-2. 自然エネルギー（再生可能エネルギー）拡大運動

ＺＥＨ、ＺＥＢの普及、メガソーラー（城陽、西郷）、ソーラーシェアリング

脱原発を機に「自然と人間の大調和の世界」実現のための社会変革

① 人間の欲望を律する生き方　ＰＢＳなどめんどうくさいが世界を救う生活

② 自然エネルギー重視の電力会社を選択する。ｿｰﾗｰｼｪｱﾘﾝｸﾞ（畑にｿｰﾗｰ）

③ 放射線廃棄物など次世代に負の遺産を残さない。（世代間倫理）

④ 新しい宗教的自然観、実相顕現運動

D　社会では　気候変動問題が大きく取り上げられた。

1997 年　京都議定書にはじまり 2015 年 12 月 12 日パリ協定、ｱﾒﾘｶ　中國抜ける

D-1.　ローマ法王フランシスコ教皇　回勅を公表　2015. 6. 13

（地球環境問題、カトリック教会史上初めて、富裕国大量消費⇒温暖化、干ばつ⇒貧困地域　生態系破壊、欲望優先のﾗｲﾌｽﾀｲﾙから　物質の奥神の御心認め　感謝生活を見直す。　温暖化効果ガス排出大国に削減努力、経済負担　消費主義批判）

D-2.　イスラム教指導者「世界の気候変動に関するイスラム宣言」2015. 8. 18

（全イスラム教徒へ　パリ協定の普遍的な合意への協力を求める）

D-3.　東日本大震災による東京電力福島第１原子力発電所の事故で、“脱原発”を決めた国がいくつも出た。

新しい文明構築に向け　　神の国、　世界平和を実現

『自他一体』を自分のものとする。　⇒　**四無量心を行じる神想観　厳修**

すべての命の一体感　右脳を活性化する。⇒　命を感じる生活の実践。

ＰＢＳ（SNI クラフト部　自転車部　オーガニック菜園部）低炭素生活を実践し信仰に基づいた生活する人を増やして、信仰的な社会を創る。

フェースブックやＳＮＳに入る　生長の家は世界宗教　　日本　⇒　世界へ発信

脱原発は世界中が認める。これを機に　信仰心に基づいた生活を世界にひろげる。
人類のいま置かれている状況を理性によって正しく理解され、原発に依存する“エネルギー中毒”の生活から遠ざかる道へと、決然として歩み出されることを願っている。

それが、私たちの子や孫世代のための責任ある決断だと考える。そのような道の一つとして、『次世代への決断』では宗教的な立場から「自然の背後に人間以上の価値を認め、自然物に四無量心を行じる生き方」を提案している